チェルヌィシェフスキーの人間学 (2)

武井勇四郎

『哲学の人間学的原理』は従来の人間学的原理の殻を，フォイエルバッハのそれをも内側から打ち破って新たな戦闘的人間学に生まれ変っている。そのことは，社会変革の理論を現実社会と理論や思想との関係の思想——理論の階級性の思想——で裏打ちすることによって，理論や思想を現実生活，社会的実践から遊離せしめた次元で取り扱うのではなく極力人間の具体的社会的実践と密接不離なものとして取り扱おうとした点に如実に現われている。というのは理論の階級性や党派性の思想は，ある思想や理論はある一定の階級の利害の何らかの意味で観念的に構成された代弁ないし表現であり，分裂せる階級社会においてある階級に属する人間の欲求・利害と有機的につながる思想であり，とりもなおさず階級・党派の利害・欲求の代弁であることを自覚公言することによって，支配的階級の支配的思想の階級的本性を露わにして，その思想とイデオロギー的に闘争することを含意しているからである。この意味で，理論の階級性の思想そのものは，これを内包している哲学そのものをひじようにラディカルな行動の哲学ないしは実践の哲学に仕立て，無階級性ないしは超階級性というエセ客観主義を堅持する支配的な観念論哲学の恐るべき対峙者にする。チェルヌィシェフスキーが『哲学の人間学的原理』の冒頭のなかで，政治理論や哲学学説はそれが属する社会的状態の強大な影響下でつくられ，どの哲学者も彼が属する社会においてその時代に優越を争う政治党派のどれかの代表者である，というテーゼを大胆に掲げた事実は，彼の哲学にひじように戦闘的性格を帯びさせ，現実批判の武器をロシア・インテリゲンチャに供したことを意味する。チェルヌィシェフスキー

の師フォイエルバッハはまさしくこのテーゼを打ち建てることができなかったし，社会の現実的批判を行っていなかったが故に，また打ち建てうる可能性すらももたなかったのである。理論の階級性というチェルヌィシェフスキーの哲学の本髄を成す思想は，素朴唯物論，機械的唯物論，直観的唯物論が肉体と精神との，物質と精神との関係を自然主義的ないしは抽象的に把握したのとは違って，人間の社会的実践とその人間的思想との関係を，第一に，社会生活における人間の利害・欲求とその観念的・思想的表現との関係において，第二に，分裂せる階級社会という具体的規定を受けた社会的存在と社会的思想との関係において論究することを意味している。そして理論の階級性のこの思想が互いに衝突し合う階級の物質的利害をめぐる実践的闘争と思想的闘争のただ中で，先行思想家たちの先進的思想を踏まえながら組立てられてくるが故に，その思想を産みだす思想家は人間の社会生活に超然としていたり，無関心であったり，局外者であったりすることはあり得ないのである。階級闘争の渦中の外にいてこの思想を産みだした思想家は歴史上いまだしらない。まことにチェルヌィシェフスキーは農民，勤労者大衆，一口でいえば庶民の利害の思想的・実践的代表者の一任者として立ち，それを自認し，ロシアを西欧資本主義に導びかんとする自由主義者陣営と真正面切って戦いを挑んだのである。彼は，思想的には，自由主義と革命的民主主義との闘争のただ中で，実践的には，農奴＝専制の打倒によって農民社会主義社会を創立せんとする地下組織活動のただ中で，まさしくこの理論の階級性の思想を打ち建て，そのことによって支配的思想の階級的性格を曝露・批判し，それをイデオロギー闘争の思想的武器たらしめたのである。以上の意味で『哲学の人間的学原理』は，もはや静かな観想する唯物論のもつ人間学の枠内に収まるものでない行動的な戦闘的唯物論であり，18世紀唯物論の特性である人間性の概念と共軛不可能なところの，社会変革の理論ないしは革命の哲学的理論の構築をめざし，かつ，かなりの程度の成果を収め得たところの勤労者の哲学，ないし庶民の哲学であり，それのロシア農奴解放前夜における宣言

であった。フォイエルバッハは感性的存在としての人間，現実的な具体的人間を，生きた欲求する利己(エゴ)として把えることによって神学的人間の概念を地上的概念にひき下げ，そのことによってヘーゲルの思弁神学を顚して地上的人間学を樹立しはした，が，その人間が拠って立っている社会的生活の具体的研究，政治や社会の地上的批判に踏み入らなかった。それがために，彼の感性的人間の概念は社会的・階級的規定を欠いた抽象的次元にとどまるのである。またそれが故に，利害や欲求は人間一般の利害・欲求の抽象的規定をうけて，階級利害や欲求はフォイエルバッハの唯物論の研究領域内に入らなかったのである。それは，支配的観念論体系としての哲学（ヘーケル哲学）にたいする批判と天上の批判に専ら限ぎられそれを生みだした市民社会の歴史と政治に視線が向けられかったからである。ここに隣国フランスの1848年事件に関心を示さずに田舎に隠居した直観的唯物論者と遠方の「闇の王国」スラヴの国からこの世界史的事件に敏感に反応を示し，それと密接不離に結びついていた社会主義諸思想に共鳴し，農奴解放を前にして自らの国の開明と社会変革に身を挺している戦闘的唯物論者との相違がまざまざと現われている。それにしても，フォイエルバッハの感性，理性的エゴイズムの概念およびそれと類縁関係をもつ個人の感性に直接訴えるベンサムの功利的概念を摂取しなかったなら，党派間の抗争の原動力が「自由」とか「言論の自由」とか「王冠」とかといった大義名分の政治的理念や抽象的概念にあるのでなく，それらの背後で働く個人や集団や階層の打算，直接的利害と感情，欲求の充足にあるとするチェルヌィシェフスキーの現実主義的欲求論は，理論的にはおそらく産れなかったであろう。したがって，フォイエルバッハとベンサムを抜いては，階級や社会の地上的欲求や利害，それも物質的利害や経済的利害の概念は導出されないし，また，その利害の追求や欲求の充足が歴史や社会の推進力であるというチェルヌィシェフスキーのいわば功利的歴史哲学といったものもでてこなかったであろう。そもそも理論の階級性の思想は，地上的人間の感性的欲求に基(もとい)をおき，それを社会階級の概念で堅め，思想と

存在の関係の唯物論的理解にかかっていなければならない。この点から考察を進めてゆこう。

チェルヌィシェフスキーによるＪ・Ｓ・ミルの階級的性格の分析にはマルクスのそれを彷彿させるほどの犀利と洞察力がうかがわれる。その分析法はこうである。ミルは，科学的真理，歴史の進展の一般的原理としては，つまり，理論的な抽象的概念のレベルでは選挙法改正にさいて選挙権を拡大し婦人参政権までをも認めることにやぶさかでなく，また，その理論的公正を自ら承認・擁護し論理的にもそれに抵抗できなく社会的にもその有益性を是認した，しかしながら実際問題としては，彼は『議会改革政治論』(1859) のなかでは，進歩主義者が要求した無記名投票は選挙人の責任感を低下させるのみで，大多数の無教養の大衆がいる実状では実害あって効なしと断じたのであった。要するにミルは抽象的概念のレベルでは婦人参政権という高貴な精神をもちはしたが，無記名投票の承認による労働大衆の大量出現によって損失を受けるような西欧ブルジョアジーの良心的な人びとのもつ感情の代表者であって，自己の階級の特権を低めはしまいかという予感を彼個人の感情で一般公式に拡大し，己れの属する階級の存立を危くする無記名投票を拒否する態度に出たのである。このチェルヌィシェフスキーのミルの理論の階級性の分析に貫ぬいている基本観念は，物質的・経済的利害という感性や欲求のもつ直接性が，まことに利己的なるがゆえに抽象理論や概念よりも実際の行動・実践面において優位に立ち，それを規定する力をもち，したがって政治家や思想家の行動なり思想が自ずと彼の属する階級の利害の反映たらざるを得ない，とする欲求優位の観念である。

ここで理論の基(もとい)をなしている彼のこの欲求論にふれる必要がある。チェルヌィシェフスキーの歴史哲学はずばりと判定しがたいが，欲求，利益，有益の観念がその底に流れていることは確かである。この意味では一種の功利的歴史哲学の形をとっていると言って差支えあるまい。彼によれば，人間歴史，その運動，政治史はある階級の物質的・経済的欲求を満しているか否かによ

って，またその度合によって大きく左右され，窮極的には圧倒的多数を占める国民大衆，庶民のその充足度に左右される。『カヴェニャック』(1858)『7月王政』(1860)『ルイ＝ナポレオン時代のフランス』(1859) 等の，フランス大革命からナポレオンⅢ世に至るまでのフランス史ないし政治史の翻訳・紹介諸論文の中で，政治形態はそれが有益をもたらしているという意見が支配している時は維持され，それが社会のもっとも強い欲求を満足させることに配慮しなくなったり，それ自体のためにのみ存在しているという意見がすみやかに広がったりするときの形態はまもなく没落のうき目に合い，また，政治形態の没落はその敵の力によるものでなく，むしろ社会にとってこれといった実を結ばなく，大衆の欲求を実現しないことが原因である，という一般定式が述べられる。たとえば，フランス政治史において，ナポレオンが見捨てられ，つぎに王政復古朝が見捨てられ，つぎに7月王政が，つぎにカヴェニャックとその輩の共和国が見捨てられ，そして間もなくナポレオンⅢ世も大衆の支持を失って同じ運命にあうであろう，と。社会の欲求の実現・圧倒的多数を占める庶民や大衆の欲求の実現，大衆にとっての利益，有益が，チェルヌィシェフスキーにあっては歴史の推進力であり，階級社会においては，この欲求の実現や利益の追求をめぐってもろもろの階級が闘争し諸党派もこれがために抗争するとされる。チェルヌィシェフスキーが論文『評論家としてのチチェリン氏』(1859) のなかで歴史は闘争なしで成功を収めたためしは一度も見当らないと明言している際でも，その闘争の根柢に流れているものは欲求というデミウルゴスである。欲求実現の欠如が政治家あるいは軍人の致命傷となって顕われる，たとえば，カヴェニャックが軍事独裁権を与えられ間もなく失脚するのは彼の国家活動が社会のもろもろの欲求に合致せず，専ら人民の利益に反してルイ＝ナポレオンの利益に向けられたからである。また進歩的思想といえども同じ次元から考察される。フランス王政復古期の大ブルジョワジーの利益に対抗して庶民の欲求を定式化しようとしたのが，彼の言葉によれば，サン＝シモン主義であり，この欲求の支持があったが故

にサン＝シモン主義は当時ブルジョワ思想と肩を並べえたのである。このようにチェルヌィシェフスキーの歴史観の根柢には数からして社会において圧倒的多数を占める庶民の欲求の実現を歴史の駆動力とみなす見解が流れており，そこには市民的欲望の利己(エゴ)を世界のもろもろの現象のデミウルゴスとしたフォイエルバッハの見解と，社会における幸福の総和の極大化というベンサムの功利主義思想と相通じるものがある。さらに彼のこの功利的歴史観には純理派(ドクトリネール)ギゾーの歴史観，とりわけ彼の階級闘争の見解と1848年からナポレオンⅢ世に至るまでのフランスの階級闘争史が深く絡み合い，チェルヌィシェフスキーの歴史哲学をひじょうに割り切りにくい不透明なものにしている。この点については最後に述べることにしよう。ここで，階級的・経済的利害が党派闘争や政治闘争の駆動力であるとするチェルヌィシェフスキーの見解を調べてみよう。

チェルヌィシェフスキーは『ルイ18世とシャルル10世時代のフランスにおける党派抗争』(1858) の中で，思想家をほぼ三つのタイプ，自由主義者(リベラル)，民主主義者(デモクラット)，急進主義者(ラディカル)に区別し，それぞれの思想像を特徴づけている。自由主義者は現状の社会の変革を回避し，枝葉末節の修正を是認し，議会統治制に賛成して，議会において政治的自由，出版の自由を要求しつつも，無産者，無教養者に言論の自由の制限を設け，人民，大衆が議会に大量参与することに反対する。これに反して民主主義者は上層階級の下層階級にたいする優位を廃し，前者の富と権力を減じ，後者に福祉を与えるように法を変え，新社会制度を堅持し，平等を希う。急進主義者ないしは革命的民主主義者——この両者の概念区別はチェルヌィシェフスキーにあっては不明確である——は社会の根本的欠陥は，修正によってでなく社会の土台を変革することによってのみ可能であると宣し，物質的諸力（暴力）によって変革を実現し，言論の自由とか憲法制度とか議会主義的事柄を眼中におかない。さらに，これに加えてこの三つのタイプの思想家の思潮は社会的・経済的利害関係に支えられて，一定の交替のリズムをつくって社会の精神史を構成するとされ

る。まず最初に現存するものの社会の欠陥の二義的側面に批判をあびせるのが穏健な自由主義であり，つぎに批判はさらにつき進んで，一義的な根本的事物の変革なくしては社会のすべての欠陥は取り除かれないとする全社会の秩序が拠って立つ原則の批判が起る，――これが急進主義である。しかし，急進主義は社会が重荷としていた欠陥と一緒に社会が大事にしていたものまで転覆するほどまで行き過ぎることに社会の人びとが気づくとき，再び穏健な自由主義の時代が訪れ，さらに逆行して昔の原理の復興が無難であるとする保守主義ないしは反動思想が興る。これが社会の精神史――社会思想史――の一つのリズムをつくり，フランス大革命からナポレオンⅢ世の時代までのフランス社会史を彩どってきた。穏健な自由主義者のモンテスキューとミラボーのあとに急進主義者のルソーおよびロベスピェールと国民集会が続き，その行き過ぎを是正するためにシェイエス，タレーラン執政官と督政官が再興し，さらに反動のナポレオンと続く。さらにこのリズムは反復され，自由主義者のベ・コンスタン，ラファイエット，ロイエ・コラール，ギゾー，1814の立憲憲章が，その後急進主義の7月王政と2月革命が，その後自由主義者のカヴェニャックが，さらにルイ＝ナポレオンの反動が続くとされる。この見解を，政治史と党派闘争，党派闘争とその思想との関係やその推移を物語っていたギゾーの著作，とりわけ『現代史に資すべき覚書』(1858～1868) やルイ＝ブランの『10年史―1830～1840―』(1841) 等の歴史や社会史から彼が学びとっていたと言って間違いあるまい。従来，ソヴェトの哲学史家がチェルヌィシェフスキー研究において，ベンサムを抹殺したと同じく，王政復古期のブルジョワ歴史家と小ブルジョワ社会主義者を自分の分析視界から遠ざけていたことは否定すべくもない。ギゾーとルイ＝ブランのチェルヌィシェフスキーへの影響については後で詳しく検討することにして，ここで指摘しておかねばならないことは，この社会の精神史のリズムがその当時のフランスの諸階級や党派の抗争のリズム，したがってその経済的・物質的利害・欲求に対応していたということである。彼はギゾーやJ・S・ミルが

していたと同様に，生産の三要素という古典経済学の観念を用いて社会の諸階級を位置づけ，それらの階級利害の観念的代弁を先きの三つの思潮とみたのである。すなわち，第一に土地を所有する土地所有者，領主，貴族は旧制度に由来している階級であり，その階級的利害の理論的表明は，彼によれば，経済学の次元では重商主義であり，生産と交換の概念に全く無縁な，古典経済学からみれば保守的思想ないしは時代後れの経済理論である。第二に，流動資本を有する商人，金持ちの産業家，工業施設の経営者，公証人，土地購入者はいわゆる中産階級（ブルジョワジー）であり，彼等は17世紀中葉から歴史の舞台に姿を現わし，18世紀後半に国政に参加して貴族階級（土地所有者）にたいし事実上優位に立ち，工場施設の規模の拡大による生産と商品の交換の発達に最大の関心を示した階級である。この階級利害の表明が経済理論においては古典経済学であり，その思想家がスミスとリカードである。彼等は皆，自由主義経済の讃美者で，チェルヌィシェフスキーの勤労者の経済学の立場からすれば「資本の理論」の擁護者にして推進者，政治的には議会を通じて言論・出版の自由の獲得をめざす自由主義者である。最後に土地も流動資本を所有しない労働者階級は，自らの労働しか有していない庶民・勤労者で，社会人口の大多数を占めている。彼らはブルジョワ階級が流動資本によって利潤を吸い上げるに反し，資本の重圧下で労働するのみで，その生産物を掌中に収めることのできない人びとで，チェルヌィシェフスキーの考えによれば，1830年，1848年の事件を事実上遂行した勢力であって，それ以来世界史の舞台に姿を現わして，時には主役を時には脇役を演じて歴史の方向をある程度定め，その後の歴史の主演者となるように定められた階級である。この階級は，チェルヌィシェフスキーにあっては，ロシアの農民も西欧資本主義国の人民，労働者，プロレタリアも内包する勤労者という大雑把な曖昧な規定をもっていた。彼らの利害や欲求はいまもって最終的に実現されていなく，それの実現に努力しその利害を思想的に表明したのが王政復古期に出現した社会主義思想であるとされる。その思想の創始者フーリ

ェ，サン＝シモン，サン＝シモン主義者，プルードン，ルイ＝ブランは，チェルヌィシェフスキーの評価によれば急進主義者ないしは革命的民主主義者であった。このように思想を階級の利害の反映とみなし，さらにその利害を生産の三要素の経済学上の概念にまで遡って解釈したことは一重にチェルヌィシェフスキーの経済学の深い理解によるものである。一見して言論の自由，権力獲得の政治的利害が議会を動かし政体を変え，歴史を進行せしめる如く見えても，それは外見であって本当の利害はその階級や党派の属する経済的利害であると見た彼の慧眼な分析力は，人間一般の欲望・利己（エゴ）としてのみしか把えられなかったフォイエルバッハの人間学の殻を社会・経済的次元より破り，またベンサムの個人的利害の社会的総和という功利主義の非社会的算術的公式をかなり大きく破産に導くものであった。政治家や思想家が一個人としての利害や打算で政治上，思想上で振舞うのでなく，意識すると否とに拘らず，社会的，経済的利害によって規定されるものであるとするチェルヌィシェフスキーこの考えは，『カヴェニャック』のなかで端的に表明されている。カヴェニャック将軍が1848年パリ労働者を鎮圧するという政治的誤りを犯した責任は，彼個人のそれではなく，却って彼が代弁していた党——「純共和主義者」党全体の責任である。彼はただこの党に支配していた意見に従ってその党の一定の思想像に奉仕したまでのこととされる。要するにチェルヌィシェフスキーは，財産関係，所有関係，さらには生産の関係が経済的・物質的利害の様式を形造り，その利害をめぐって社会階級の闘争が起り社会思想も形成されるのであるという理解にまで部分的にたどりついたのである。

ある理論や思想がある階級の利害の表現であるという思想を宣明することは，自己の理論がある階級利害の表現であることを含意するから，チェルヌィシェフスキー自身が自己の理論がどの階級の利害の代弁であるかを自覚していることでなければならない。もしそうでなければ理論の階級性の思想は自然発生的産物となりその思想の発生そのもの論理内容に悖ることになろ

う。事実，彼は自己の経済学理論を「勤労者の理論」として自覚し，自己の社会主義思想を農民大衆のそれとして考えたし，自らの哲学――人間学――を庶民のための変革の理論として自認していたのである。彼が活躍していた50年代末から60年代初頭の時代の思想の抗争は，一方においての，西欧資本主義の軌道にロシアを乗せようと努めて西欧自由主義的経済思想を吹聴していたロシアの自由主義，すなわち1861年のアレクサンドルⅡ世の農奴解放を讃美していた改革派自由主義陣営と，他方においての，その農奴解放が農民から土地を収奪する欺瞞的政策で農奴＝専制の残存であるばかりか，自由主義者が讃美する資本主義的軌道が西欧のプロレタリアを産みだす資本家の社会であると道破していた革命的民主主義陣営との思想の抗争であった。このことをチェルヌィシェフスキーはわきまえていたし，自らこの抗争に後者の陣営から身を挺して戦っていたのである。ロシアの近代化をめぐって二つの路線，西欧型資本主義を盲滅法に踏襲する路線と，農奴＝専制の転覆と資本主義批判の上に立って，ロシア型社会主義を実現する路線とが存在していて，その路線と対応して二つの思想が互いに抗争しているとみたてて彼は，後者の思想的立場から西欧資本主義崇拝の自由主義者と農村・社会・政治問題で論争することを自己の思想的任務としていた。農村共同体を取り入れて農村共産主義社会を実現することが可能であるとみた点は，彼の空想であったが，本質的な思想闘争がこの二者間で行われるのであるとみていたのは正しい。当時，ゴルロフ，ベルナツキーのロシア自由主義者は明らかにロシアの農奴制的生産様式を廃止し自由な労働と資本主義的生産様式を求めていた大地主や発生しつつあったブルジョワジーの利害の代弁者として，西欧から数世紀も立遅れたロシアに早急に，無原則的に西欧資本主義の諸制度，とりわけ自由主義経済制度を輸入せんとする資本主義的経済的自由の讃美者であった。彼らがロシアにフランス俗流経済学者セイ，バスティアの思想を導入して，laissez faire, laissez passer を唱道したのにたいして，チェルヌィシェフスキーはその経済理論を古典経済学より数段おとる時代後れの「資本家の

理論」であると断を下し，庶民の利害の表現である生産者が同時に所有者であるという「勤労者の理論」，つまり社会主義社会の経済理論を「資本家の理論」に対峙させた。ロシア自由主義者の農奴＝専制の批判は革命的民主主義者のそれとさして変るものでなくむしろ共通分母であったが，ロシアの進むべき道にかんしては真正面から対立し自由主義者は下からの社会変革を避けて上からの解放ないしは改革によってロシアの資本主義化を目論み，わずかに抬頭して来たロシア・ブルジョワジーの自由労働者の創出という要請に応えたのである。この穏健な自由主義にたいして，チェルヌイシェフスキーは，それが讃美する資本主義はすでに歴史的使命を遂げ，西欧社会において労働のみしか有しないプロレタリアートという害悪を産みおとしている経済制度で踏襲するに価しないと断じ，すでに西欧社会において労働者の利害を表明する思想——社会主義思想が出現している以上，ロシアのとるべき未来の道は社会の圧倒的多数の庶民の利害を護る社会制度でなければならないと，かなり道徳的命法がかった調子で喧伝したのである。たしかにチェルヌィシェフスキーが考えたロシアのとるべき道は空想であったが，自由主義経済にたいする批判，自由主義的な枝葉末節の修正をこととする「上からの革改」への批判のなかで，真理のエセ客観主義を墨守する実証主義ないしは真理の超階級性を主唱する観念論哲学にたいする批判のなかで，革命的民主主義者チェルヌィシェフスキーのラディカルな哲学は形成されているのである。

彼の功利的歴史哲学ないしは人間学的歴史観の一要素を成す庶民の利益，勤労者の欲求という概念内容は当時のロシアの社会経済制度の未熟度を反映したものである。農奴も，小作農も，都市の工場の労働者も無産の雑階級（ラズノチンツイ）もすべて包含している庶民とか勤労者一般という概念は，明らかにロシアの農奴制の色濃さと未発達なロシア資本主義の貧弱さとを反映していたのである。生産の三要素のうち土地も資本も有しない階級という考えが勤労者一般の概念に至りつくことは容易に分かるし，この観点から

「勤労者の理論」という文字通り，人口の圧倒的多数を占める庶民の利益のための理論が発想されるのも頷けるのである。しかし「庶民」という社会学的に抽象的な性格を帯びるにせよ，庶民の利害を明確に支持しているこの「勤労者の理論」を一つの思想的力として自由主義者の，特にセイ，バスチアの俗流経済学理論に，彼が対峙させたことは大きな意義をもっているのである。というのは，理論の階級性の思想は，理論と実践との関係，思想と社会的存在との関係を社会史的視座から検討する以上，思想や理論が社会的存在や人間実践の反映であるという側面だけに脚光を浴びせるだけでなく，理論や思想が社会的存在や人間実践に対してどんな役目を果すかを考察していなければならないからである。社会的存在は社会的思想を規定するが，社会的思想は社会的存在を決定する。社会的思想は社会的現実，社会的利害によって現定されると同時に，単に受動的機能を果すのでなく，良い意味でも悪い意味でも社会的現実にたいして何らかの思想的威力をもつものであり，支配思想にあっては支配階級の利害を固め，被支配思想にあっては来るべき社会的現実を観念の上で先取って決定するか，現実の矛盾を解決するか，する力をもっているからである。チェルヌィシェフスキーによれば，社会理論，政治理論，思想，哲学学説は歴史的事件を促進したり，阻んだり，後退させたりする現実的威力をもち，いかなる新しい事柄もそれに先だつ理論なしには社会において確立しないのである。彼の言葉を借りれば，人民のなかでは新しい理念が生活の力強い推進力である。こういう観念があったからこそ，彼は積極的に未来社会を理論的に先取りした農民社会主義とその経済理論である「勤労者の理論」をロシアのインテリゲンチャに供したのである。と同時に，彼は自己の立場は勤労者一般のそれであり，自己の理論がその大衆の利害の代弁であることを明確に自覚して，地主・ブルジョワジーの利害の代弁者たる自由主義者の思想の階級性の曝露に努力を注いだのである。

以上の記述で，理論の階級級性の思想を専ら経済学理論に限った観を与えたかもしれないが，実は，もっとも階級的利害関係から遠ざかっていて，恰

も無階級的・超階級的性格をこととするように見える哲学学説が，まさしく階級的・党派的であると『哲学の人間学的原理』のなかでチェルヌィシェフスキーは明言しているのである。彼の性格付けによると，カントはドイツに自由を革命的な仕方で導入しようとしながらもテロリスト的手段を嫌った党派に属し，フィヒテはそれより数歩先んじた愛国者のスポークスマンであり，シェリングは革命に驚き中世の静けさを求めドイツに封建国家を再興しようとした党の代表者であり，ヘーゲルは弁証法という原理においては革命的であったが，その結論，体系において極度に保守的で，革命的精神を防ぐことにあった，と。では一体，政治理論や経済理論のそれと違って哲学の階級性をどの点にチェルヌィシェフスキーは見て取ったのであろうか。これに答えるにはフォイエルバッハとヘーゲル哲学の違いを検討するのがよかろう。チェルヌィシェフスキーは『現実と芸術との美学的関係』第三版への序文(1888)のなかで，フォイエルバッハは1848年の事件に少しも関心をもたず，ドイツ国民会議の議事にも参加しなかったが，彼の哲学は形而上学体系と全く異っていたと死ぬ間ぎわに述べている。これに対して，ヘーゲル体系は原理と結論（弁証法と体系）とが自家撞着した哲学体系を成し，真理を予見しはしたがもっとも一般的・抽象的な，生活から遊離した形而上学である，と『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』(1856) のなかで彼は述べている。この形而上学的性格が，彼の見解によると，ヴォルフの哲学からカントの知識の主観性と不可知論を経てヘーゲルの「思惟の弁証法」において頂点に達したドイツ哲学の性格をなし，具体的生活から超然とした哲学の特徴となったのである。つまり，ドイツ観念論哲学のもつ形而上学はロシアの革命的民主主義者のいう「生活の哲学」，「生活のための哲学」であり得なかったのである。チェルヌィシェフスキーは，師フォイエルバッハがどの党派に属し，どの階級の利害を代弁したものであるかを一言も述べていないが，彼の感性的人間，地上的人間，現実的人間の観念から見て，庶民の立場の哲学として評価していたのであろう。フォイエルバッハの唯物論的人間学は自然科学を基礎におく人間

有機体(オルガニズム)，人間生活の現象をすべて一元的に説明する原理であり，理念，神に支配された人間でなく，肉体的諸器官とその欲求・欲望をありのままに認めその充足を是とする地上的人間学である。その限り，ヘーゲルの形而上学的哲学と大きく違って当時の生理学，生物学，医学等の学問水準にマッチした現実の人間生活を唯一の現実・真実とする哲学であり，その意味で庶民の生活の理論的・哲学的表現であり得たのである。

チェルヌィシェフスキーが理論の階級性という場合の理論は，専ら政治理論，経済理論，社会思想と哲学学説とであって，自然科学の理論はとりたてて取り扱われていない。これは彼の注目がわけてもロシアの進むべき社会的進路に向けられていたことによるといえよう。彼は自然科学の理論の階級性の問題よりももっと重大な認識論的問題に気づいていた。それは理論の階級性と理論の真理性との関係であり，階級利害が真理性を歪曲するというきわめて認識論的に重大な局面である。従来，チェルヌィシェフスキーの哲学の研究において，ソヴェトの史家は彼が行った西欧およびロシアの哲学者，政論家，歴史家らの階級的性格の曝露の仕事のみをとりあげることに懸命であった。例えば，史家は，チェルヌィシェフスキーが剔抉したミル，クーザン，ジュール・シモン，コント，プルードン，ルイ＝ブラン，スミス，リカード，バスティア，ロッシャー，ヘーゲル，シェリング，カント，ロシアのチチェリン，カベリン，ラヴロフ，ベルナツキー，ゴルロフのもつ思想の階級的性格を列記して紙面を埋めた。成程，チェルヌィシェフスキーが西欧の思想家，ロシアのその崇拝者の階級的性格を曝露することは，61年の農奴解放をめぐって争われていた思想の性格を浮彫にすることに資して重要な仕事であったことは否定すべくもないし，この点で彼が非常に大きな功績を後世に遺したことも否定すべくもない。しかしながら，彼はただこの曝露的仕事にのみ力を注いだわけではなく，階級的利害や個人的打算によって真理探求が損なわれることをマルサスやプルードンの階級的性格の曝露と合せて分析しているのである。特に彼のマルサス分析には瞠目すべきものがある。この

点を詳述しよう。

『人口論』(1798) のなかでマルサスが論難したウォレス，コンドルセー，ゴドウィンは何らかの意味で進歩主義思想の持主であって，チェルヌィシェフスキーの社会主義観念と彼等のそれが合致するものではないにしろ，私有財産のない平等社会を理想とする点で同類的なものをもっていた。『様々な展望』(1761) の著者ウォレスは，無数の貧者，富と権力のための反目，軋轢虐待，土地の荒廃，技術の停滞等のすべての害悪は一重に私有財産に起因するから，共有財産を本質とした共同労働するユートピアを夢想していた。ウォレスが人口過剰が遠い将来の共産主義国家を破壊するであろうと憶測した時，マルサスは人口増加は遠い将来のことでなく近々の問題であるとして，彼の楽観主義を根拠なしと反論した。『人間精神進歩の歴史』(1794) の著者百科全書家にして共和党の政治家であるコンドルセーは，理性と知識の進歩に限りない信頼をおき，普遍的正義と平等な諸権利に基づいて建設されるユートピアにおいて教育と啓蒙を介して人類ははてしなく完成するとその著の結論として述べていた。マルサスはこの理性崇拝による人間の無限の完成は自然的必然性をもった肉体的欲望，性欲による人口増加によって不可能であると反駁した。『政治的正義に関する研究』(1793) の著者，フランス啓蒙思想に共鳴しコンドルセーと相通じる思想の持主ゴドウィンは，文明社会の悪徳，窮乏，権力，暴力，奴隷根性，不平等，理性の圧殺はすべて政府に根をもつが，人類が理性と啓蒙に従うならそれらの悪の根源たる政府のない理想社会を建設できると主張していた。ゴドウィンが理性の支配が人口増加と生活資料（食糧）の増加との関係の問題を容易に片つけうると考えたのに対して，マルサスは幾何級数的人口増殖によってゴドウィンの言う平等社会制度は30年もしないうちに完全に潰(つい)えてしまうとした。この様な食糧が算術級数的で人口が幾何級数的増加であるとするマルサスの定式による反論や反駁はチェルヌィシェフスキーの洞察深い見解によると，事実をほとんど研究しないで案出し虚構した定式によるそれであり，何故ならば，マルサスがウォレ

ス，コンドルセー，ゴドウィンといった急進思想家に反対するの余り，自己の定式がこの急進思想家に反証を与えそれを打ち負かすに足るとみるや否やその定式のその後の研究を彼は中止してしまったからである，つまり，マルサスは現存秩序を弁護しようとした意図が最初にあったため自己の定式に安んじてそれ以上研究を続けずに真理への途を途中で中断したからである。このチェルヌィシェフスキーの意味する内容は，ある思想家が属する階級の利害が真理探求を阻害するか歪曲するかするという認識論上のきわめて重大な事実であり，したがって階級利害という感性的直接性が，真理認識という抽象的科学的活動をねじまげ得るということである。たしかに，チェルヌィシェフスキーはマルサスの『人口論』のもつ反動的思想の階級性をイギリス社会史のなかで見事に描いている，——イギリス社会の大衆はフランス革命の初期にその革命に強く共鳴し，ゴドウィンの『政治的正義に関する研究』はこの共鳴のなかで大成功を収めた，しかしこの本が世に現われた時にはすでにイギリスは対仏大同盟を結び，フランスとのたび重なる戦争のためよけいに反動的方向に向っていた。その結果，フランス革命は嫌悪すべき無分別の事柄であり，その原理は虚偽であるという社会風潮に急変した。この時，マルサスの『人口論』の出現と相成ったのである，と。チェルヌィシェフスキーの性格づけによると，マルサスは穏健な自由主義者の党に属し，問題が根本的変革に及ばない第二義的な事柄である間は非常に自由に論議したが，一旦現存秩序の真の根柢までゆらぐ変革である場合は保守主義ないしは反動思想になりさがる自由主義者であったのである。このマルサスの反動思想の階級性の社会史的分析に加えて，チェルヌィシェフスキーは階級利害に押されてマルサス個人の研究態度が歪められるという階級利害の認識活動の内的メカニズムに及ぼす先きの認識論上の重大な問題を解明していたのである。つまり，マルサスが現存秩序の維持のために急進思想を反駁するの余りかの定式で急進主義者を反駁できるとみるや，その定式をさらに検討することを放棄した，とするチェルヌィシェフスキーの見解は理論の階級性と理論の真理

性との認識論的関係の問題に光を当てているのである。それは，階級利害を反映している理論や思想は必ずしも真理を穿ち表明するものではないということ，したがってこのことから必然的に導出されることであるが，支配階級の支配的思想にとっても，被支配階級のいまだ支配的になっていない思想にとってもそのことは同等に主張されるということである。換言すれば被支配階級の利害を表明していても被支配階級の思想は真理ではないということであり，もし逆であるなら支配的思想が誤りで，被支配階級の思想のみが進歩的で真であるという，まことに功利的な実用主義的な真理観となり，ひいては階級的主観主義に陥るであろう。たしかに，チェルヌィシェフスキーの見解のなかには，全人類的利益は個々の国民の利益より数量的に大であり，数量的に大なる利益が最高の善であるというベンサム流の数学的客観性に依拠した判断方式があるが，社会の圧倒的多数を占める庶民の利害を代弁することが，直ちに真理を表明したものであるという結論を導きえないことに気づいていたので，彼はマルサスの定式がブルジョワ階級の利害の表明であるという理由のみによってその定式が誤謬であるとは断じていないのである。もしそう断定するならば，彼が提唱する勤労者の理論が庶民の利害の代弁であるから真理だというひじょうに安易な真理観が生れてくることになる。彼の歴史哲学には，なるほど，社会の圧倒的多数を占める庶民の欲求の実現が歴史の駆動力であるという一種の功利主義的側面がありはするが，他面，階級利害の表明，即(そく)，真理の表明とする階級的主観主義ないし階級的真理論を認めていたわけではない。理論の階級性，即(そく)，理論の真理性という一時「マルクス主義哲学者」のなかに横行した「手法」のとりこになっていた哲学史家は，チェルヌィシェフスキーのこの貴重な認識的問題に眼もくれず，専ら彼の西欧やロシアの思想家の思想の階級性の曝露の作業にのみ眼を奪われたことを再度特記しなければならない。彼はマルサスの定式を階級性の視点からのみ論駁したのでなく，マルサスが度外視した移民，出生率，死亡率，農業生産技術の改善等の事実に則した研究に基づいて内在的に批判して，その定

式の誤謬性を曝露しているのである。これがためマルサス批判は『J・S・ミル「経済学原理」への評言』のなかで莫大なページ数を占めているのである。階級的利害に立っていても必ずしも真理を穿つものではないという別の例を，チェルヌィシェフスキー自身学生時代に影響を受けた急進的社会主義者プルードンとロシアの同時代の革命的民主主義者ラヴロフに彼は見出している。J・S・ミルやマルサスが西欧ブルジョワジー（中産階級）の利害を表明した自由主義者であったのにたいして，『革命と教会における正義について』(1858) の著者プルードンはまぎれもなく西欧の庶民の労働生活や勤労者の利害の忠実な代弁者であったけれども，現代の科学的知識水準にマッチした思想家ではなかったのである。なぜならプルードンはドイツ哲学をヘーゲルの形而上学体系で学びそれを自己の最終的結論としていたからである。チェルヌィシェフスキーの評定によれば，プルードンが最終的結論にしたヘーゲル哲学は，フランス王政復古期の世論を支配し，第1帝政の時代に端を発する精神によってつらぬかれ原理（弁証法）において革命的で結論（体系）において極度に保守的な，二重性を備えた形而上学体系の哲学，政治および神学的対象においては彼の弁証法に甚だ思弁的な反動的衣裳をまとわせた思弁哲学の最高峰であった。チェルヌィシェフスキーが批判した点は，プルードンの無政府主義ではなく，歴史の順序に逆行して諸理念の継起にしたがって構成する，『貧困の哲学』(1846) のなかで示したヘーゲル主義，神，「普遍的理性」，「人類の非人格的理性」の展開による経済的カテゴリーの顚倒せる産出方法であった。一口で言えばヘーゲル観念弁証法の鵜呑みであった。この意味で，当時生成しつつあった自然諸科学，とりわけ人間有機体を扱う生理学，医学，生物学の学問的水準に対応できず，J・S・ミルの社会哲学同様，プルードンも唯物論哲学の代表者となり得なかったと評されるのである。

チェルヌィシェフスキーが『哲学の人間学的原理』を書くきっかけをつくったロシアの後の革命的ナロードニキの代表者，『歴史書簡』で個人の理論を供したラヴロフは，理論の無党派性を主唱するジュール・シモン，折衷主

義者クーザン，小フィヒテ，ミル，プルードンよりは進歩的思想家としてはるかにましであるとチェルヌィシェフスキーからかなり高く評価されたが，そのラヴロフは真に偉大な思想家とロシアに場違いなな西欧思想家から自己の思想を導びき出した折衷主義的性格の思想家であったと判じられた。プルードンもラヴロフも庶民の利害を表明する立場にいたが，前者はヘーゲル主義に陥こみ，後者はもろもろの思想を折衷して思想の一貫性に欠け，共に現代科学，とりわけ自然科学に基礎をおいたフォイエルバッハの唯物論，ひいてはチェルヌィシェフスキー自身の戦闘的な生活のための唯物論を把握していなかったのである。以上のようにチェルヌィシェフスキーは階級的利害の表明，即(そく)，真理性の表白でないと述べたのである。

他方，理論や思想が階級や党派の利害とは全く無関係な歴史の必然的結果であるとする客観主義が，いかに自己の階級的利害を隠蔽する欺瞞的理論であるかを，チェルヌィシェフスキーは『評論家としてのチチェリン氏』(1859)のなかでえぐり出している。チェルヌィシェフスキーの鋭い慧眼は，自由主義的評論家チチェリンが不偏不党という言葉で，旧い秩序を保持し，新しきものを求めるものにたいする敵意を隠蔽し，公正という言葉で，他人の苦悩とそれにたいする利己的無関心さを隠蔽していると看破した。まさしく，チチェリンは歴史の客観主義の立場に立って不偏不党，非階級性，超階級性の理論を歴史的必然性という客観主義的概念でごまかし，さらにその歴史的必然性を理性性に観念論的に帰着せしめたスコラ哲学者であった。このチチェリンのエセ客観主義は，階級闘争は悪であると喧伝して実は現存秩序の擁護をこととする階級の理論的表明であることを，革命的民主主義者が喝破したのである。周知の如く，理論の不偏不党という観念は一見して階級的利害を超越しているゆえに普遍的真理を含んでいるかの如き印象を与えるものであるから，チェルヌィシェフスキーはまさしく理論のエセ客観主義と思想的に闘争することがその当時の時点で有効な成果を期待できると考えていたのである。このように彼は理論の階級性の思想の検討するなかで一方ではエセ客

観主義を論難すると同時に，他方では階級的主観主義を批判して，その思想をかなりの程度の高さにまで論及しその中味を重いものにしていたのである。

最後に，チェルヌィシェフスキーの理論の階級性の思想形成において，従来，ソヴェトの哲学史家の注目を惹なかった19世紀前半期のフランス王政復古期の史家とプチブルジョワ社会主義者と評価されているルイ＝ブランの演じた役割を論及しておくことは，チェルヌィシェフスキーの歴史哲学，ならびに人間学の性格づけにおいて必要不可欠なことである。前に示唆しておいたが，ギゾー，ルイ＝ブランのチェルヌィシェフスキーへの多大な影響は，彼らがブルジョワ歴史家とかプチブルジョワ急進主義とかの故に，ベンサム同様に，チェルヌイシェフスキー研究者の視界から遠のけられ，ないしは抹殺されたかの観が残念ながら見受けられるのである。従来，チェルヌィシェフスキーの世界観形成に大きなインパクトを与えたのは，ソヴェトの史家の指摘によれば，ドイツ古典哲学者，フランス空想社会主義者と古典経済学者であり，ちょうどマルクス主義の三つの源泉がロシアの思想にも流れこんだとするマルクス主義思想形成に倣った研究方法である。そして史家は1848年の事件とロシアの農奴解放前後の革命的情勢（1859～61）が彼の世界観形成に与って力があったとするのである。筆者は以上のことを否定はしない，が，しかし，フォイエルバッハの人間学から理論の階級性の思想に至り得るには理論的にかなりの距離があり，前者から後者の思想をじかに導出するにもかなり無理な作業が横たわっている。なぜなら三つの源泉のいずれにも階級闘争の理論や，思想の階級性の思想はテーマになっていないし，チェルヌィシェフスキーがロシアの伝統的思想を受け継いでいたにしろ，ベリンスキーにも，ゲルツェンにもその思想は見当らないからである。1848年という生ま生ましい階級闘争の実践が彼に大きなインパクトを与えたことは否定できない事実であるが，これは書物と新聞を通してのそれであって，生まの事件の推移を直接目撃してのそれではなかった。ロシアの革命的情勢はたしかに自由

主義思想対革命的民主主義思想の闘争であり，改革＝地主ブルジョワジー対農奴農民大衆との闘争であり，世界史的にみても，50—60年代はアメリカの南北問題，イタリアの統一運動，イギリスの選挙法改正運動，フランスのルイ＝ナポレオン時代の抗争等々が生まの事実としてチェルヌィシェフスキーの理論の階級性の思想形成に影響を与えたことは否めない。それにしてもフォイエルバッハの直観的人間学的唯物論とチェルヌィシェフスキーの理論の階級性の思想との間には，当時の事実としての生まの政治運動，社会実践にかてて加えて記述としての歴史や社会史，記述としての階級闘争の理論，記述としての社会思想史が介在するとみなければならないのである。以下この点について傍証しよう。

およそ階級闘争は政治形態の交替，推移，諸党派の隆盛・衰退のなかではっきりした輪廓をとるものであって，この輪廓がもっともはっきりと歴史に顕われたのが，何といってもフランス史を除いて他にあるまい。フランスこそ歴史上の階級闘争が他のいずこにもまして明確に姿を示した国であると言える。そのフランスの歴史，ないし社会史を奇しくもチェルヌィシェフスキーの学生時代 (1846～1850) が迎えたのである。学生時代の彼は眼を，ときまさに1848年２月事件から西欧諸国に向け，“Débats” 紙を通じてこの事件を追跡し，この事件と切っても切れない人物や思想家，王政復古期の思想史を彩どったギゾーとティエール，プルードンとルイ＝ブラン，フーリェとサン＝シモンを識り，以来，彼らにたいする関心を60年代に至るも失なわなかった。それどころか彼はフランス大革命から1830年，1848年を経てルイ＝ナポレオン時代までのフランス史，フランス社会史を専らロシアの読者に『現代人』誌を通じて精力的に伝えているのである。チェルヌィシェフスキーが書きまくった論文や抄訳を歴史時代順に並べてみれば『ティルゴー』(1858)『ルイ18世とシャルル10世治下のフランスの党派抗争』(1858)『７月王政』(1860)，『カヴェニャック』(1858)，『ルイ＝ナポレオン時代のフランス』(1859)，『フランスにおけるジャーナリズムの自由についての問題』(1859)

であり，いずれも1858～1860年の改革前に書かれているのが特徴である。これらのフランス政治史や社会史はロシアの自由主義思想家の反駁においてひじょうに大きな意義を合せもっていたのである。なぜなら彼はこれらの諸論文や紹介論文でフランスの自由主義的政治家や思想家を人民の立場から辛棘に批判することによって間接的にロシアの自由主義者を批判していたからである。チェルヌィシェフスキーは『ルイ18世とシャルル10世治下のフランスの党派抗争』においては，ギゾーの『現代史に資すべき覚書』(1858) とルイ＝ブランの『10年史—1830～1840—』(1841) を用い，『7月王政』においては専ら『10年史』を用い，その部分訳を紹介し，『ルイ＝ナポレオン時代のフランス』においては Westminster Review 誌に載った"France under Louis Napoleon" (1858) を利用していた。このことからもわかるように，ギゾーとルイ＝ブランのフランス社会史の彼におよぼした影響はひじょうに大きいのである。1848年の革命には二人の注目すべき人物，政治家にして純理派(ドクトリネルー)の歴史家ギゾーが右に，「国民工場(アトリエ・ナシオノー)」の提唱者にしてパリの労働者を欺いたルイ＝ブランが左にいた。チェルヌィシェフスキーのギゾーの歴史，文明史への誘いはこの2月革命のロシアへの雷鳴とともに始まり，彼はギゾーの『イギリス革命史』(1872～28)，『ヨーロッパ文明史』(1829～32) を学生時代に愛読し，彼を大立者として尊敬していた。また彼は2月革命に対しては並々ならぬ関心を寄せ当時ラマルティーヌの『1848年革命史』(1849)，シスモンディの『フランス史』(1821～44) を併読している。彼がギゾーの文明史から教えられたことは，フランス革命において第三身分が僧侶・貴族階級に公然たる流血戦を挑んで最終的に勝利したこと，1814年ブルジョワ王家の復興において諸党派が互いに抗争していたこと，7月革命を経て金融ブルジョワジーが出現したこと，1848年6月事件でプロレタリアートが歴史舞台に登場したこと，ルイ＝ナポレオン時代にフランスが産業革命を経験して行く中で資本家と人民が対立していたこと，等々であった。そしてさらにギゾーの歴史観と歴史研究方法であった。つまり諸党派の抗争，政治制度から社会の状態，

文明の状態を知るのでなく，その原因となっている国民の状態，社会の物質的条件，革命や社会的状態，市民状態，人民の状態，社会や社会構造とか個人の社会的地位とかに依存している生活様式や各種の階級や人々の関係を研究する，という歴史観や方法であったし，また，思想史的に史家ギゾーの偉大なる発見である階級闘争の思想であった。ギゾーによれば，政治党派の抗争は言うに及ばず宗教闘争ですら権力及び勢力獲得のための階級の闘争を包んでおり，近代ヨーロッパ社会は社会諸階級のこの闘争の産物である。そしてさらにこの諸階級の利害と欲求は多様で，これをめぐっての闘争が政治上の深刻な敵対関係を産み出し，そのことがヨーロッパ文明の発展のもっとも力強い原理，推進力となっているとされる。概して，王政復古期の史家に共通する見解は，政治党派や宗教分派が社会諸階級の実質的な生活利害，生活の必要，経済的利害，とりわけ彼らの財産関係，土地関係に依存しており，その利害の追求をめぐっての闘争がもろもろの政治上の起動力を成すという見解である。これはフランスの唯物論にその系譜をもち，エルヴェシウスの言う功利の原理が最高の法則であるとする欲求論に通じている見解と言える。ベンサムの功利論がエルヴェシウスにその源の一つを発することを考え合せれば，この王政復古期の史家の歴史観の底流をなしている見解はフランス唯物論の欲求論であり，またそれがベンサムの功利的人間とフォイエルバッハの感性的人間に相通じるものであることが自らわかるのである。この意味でフォイエルバッハの人間学的唯物論とチェルヌィシェフスキーの理論の階級性の思想との間にギゾーが介存していることの重要性がわかる。

他方，ルイ＝ブランの『10年史』がチェルヌィシェフスキーに教えたことは，7月革命を遂行した自由主義者（中産ブルジョワジー）はパリの労働者の援助なしでは不成功であったこと，庶民の利害がまもられない時にはいつまでも政体は交替を余儀なくされること，大衆の物質的・経済的状態への不満が大破局（革命）への導火線であり，大衆は政治形態よりも大衆の欲求の実現に大きな関心を寄せるものであること，そしてこの明白な証明が1831年の

リヨンの暴動であったこと，そして思想面では大衆の欲求を満足させ時代の要求に応えた最初の思想がサン＝シモン主義で，現存秩序を破壊しようとする思想はすべて支配階級によって弾圧されるということ，等々であった。『10年史』Ⅱ，Ⅲ，Ⅵ巻は7月革命の経過と党派闘争の推移，サン＝シモンおよびサン＝シモン主義思想（ティエリ，コント，ロドリーグ，アンファンタン，バザール，シュヴァリエ，ジャン・レイ，ピェール・ルルー）をフランス政治史と連結して提供していたのである。たしかに「ルクサンブール委員会」のルイ＝ブランは何の権力ももたずにこの仕事を引き受け，暴力はいかなる場合においても良きものをもたらさないという考えでもって労働者の代議員を前にして平和手段に訴えるよう演説し，事態の引き延し策にで，パリの労働者を欺いた。この彼の大犯罪をチェルヌィシェフスキーは手きびしく非難しているが，しかしルイ＝ブランからはフォイエルバッハやベンサムにない思想を吸収し，彼の理論の階級性の思想の形成に資すること大であったことは疑いない。マルクスによってプチブルジョワ急進主義者であると酷評されたルイ＝ブランの著作を読み彼の政治活動を終始見守っていたからとてチェルヌイシェフスキーがプチブルジョワ急進主義者であることには全然ならない。ギゾーとルイ＝ブランの歴史や社会史および階級闘争の見解を介して，チェルヌィシェフスキーはフォイエルバッハの利害一般，ベンサムの功利原理をある階級の利害，ある階級の経済的利害という具体的規定に高め，その利害の思想的表明ないしは政治的代弁を社会階級の思想や理論として把握できたのである。さらにギゾーの歴史哲学とチェルヌィシェフスキーのそれとの近似性を指摘しなければならない。ギゾーの歴史哲学が終始一貫して自己の階級闘争の理論でもって貫ぬかれていなく，しばしば人間の本性や摂理（神）が顔を出して階級闘争理論を曇らしている。チェルヌィシェフスキーが学生時代愛読した『ヨーロッパ文明史』と『フランス文明史』はそれぞれ1860年，61年に露訳された，それを機会に彼は書評を書き論文『ローマ没落の原因』(1861) を著わしたが，そのなかにはかなりギゾー的人間学の側面が露呈して

いるのを否めない。たしかにチェルヌィシェフスキーは，20年代のギゾーは健康な歴史観をもっていたが，7月王政中の彼はすでに穏健な自由主義者を通り越して保守派に廻り，革命や階級闘争を無政府と破壊のきわみと公言するほど反動的思想に陥り，1830年，1848年において歴史舞台に抬頭した庶民（人民）の利害に極度に反する行動にでたと，ギゾーの政治家としての活動を批判しているが，それにしてもギゾーの歴史哲学との類似性がロシアの革命的民主主義者に見受けられるのである。ギゾーが『ヨーロッパ文明史』第一講で開陳した彼の歴史哲学はこうである。文明とは事実である，一方において社会状態，社会生活，社会関係，制度，商業，戦争，統治制度という事実であり，他方において人間の眼にみえない人間精神に関係している個人的事実，宗教的信仰，哲学思想，科学，文学，芸術などの事実である。文明の進歩はこの二つの事実要素の総体としての進歩であり，一言でいえば社会の発達と精神の発達である。そしてこの二つの内的関係はこうである。文明の二つの要素が相互に結びつき，互いに他を生む，人間の内部精神の大なる発達は社会の利益となり，社会状態の大なる発達はすべての人間性の利益となる。二つの事実のいずれか一方が優越し，光彩陸離として現われ，世界の歴史の運動に対して特殊な性格を与える。一方において人間が一つの観念を，一つの能力を獲得する時，つまり個人的に進歩するとき，彼は自分の内部で成就した変化・改善を自分の外部に拡張して世界の局面を変化させる。他方において一つの革命が社会状態のなかで成就すると，社会は前より一層良く調整されもろもろの権利と利益は一層正しく個々の人間に分配され，世界の光景は一層純粋に一層美しくなる。こうして今度は外的事実のこの改良が人間の内部に，人間性に反作用を及ぼし，人間自身を一層正しくする。故にこの二つの要素，つまり社会の発達と精神の発達は相互に緊密に結ばれているのである，と。このギゾーの歴史哲学は，個人が社会をつくるか，社会が個人をつくるか，あるいは人間性が環境をつくるか，環境が人間性をつくるか，という18世紀フランス唯物論のアンチノミーを，二つの要素の相互作用

が成す歴史運動の設定によって脱却しようとしている点でフランス唯物論より一歩前進しているといえる。しかしながら二つの要素のこの相互作用のなかでいずれの要素が規定的役割を果し，いずれの要素が解決する（決定的）役割を果すのかを明確に理解していないので，ギゾーはどの要素も同じ権利を主張するとみる。この点でフランス唯物論のアンチノミーは解決されないで残される結果となっている。そのため，ギゾーが歴史の研究において物質的諸条件，社会状態，階級闘争，その基礎となる財産関係，土地関係を研究することが不可欠であると主張していても，その上に生れるもろもろの観念，人間精神の諸産物が，何がもとで発生してくるのかを理解できなかったので，結局，二つの要素，社会の発達と精神の発達の相互作用を起すのは摂理となるのである。この点でギゾーの歴史哲学は観念論の色彩をぬぐい去ってはいないのである。チェルヌィシェフスキーにはこの摂理の観念論的色調は微塵も見られないのであるが，彼に歴史は何によって進歩するかと質したら，二つの答えをだすのである。歴史は階級闘争によって進歩する，また歴史は啓蒙によって進歩する，と。そしてこの二者の答の間にいかなる関係があるのかとさらに質すなら，彼は絶句するであろう。チェルヌィシェフスキーは『評論家としてのチチェリン氏』(1859) のなかでは，歴史は闘争なしで成功した試しは一つとしてないと記し，『ローマ没落の原因』(1861) のなかでは，一般に進歩は知的発達に基礎をおくから歴史の知識が仕上げられれば，社会生活を営むに妨げとなっていた誤った観念はとり除かれ，社会生活は成功裡に営まれる，と述べ，その二者の間の関係については何ら触れていないからである。こういうわけで一方の極には階級利害の追求をめぐる階級闘級闘争が歴史の起動力となるという戦闘的見解が立ち，他方の極には歴史進歩の基本的力が啓蒙であって知識の普及度と完成度がその進歩に比例するというフランス啓蒙主義の理性主義が立ち，いずれも己れの権利を同時に主張し合うのである。ここにチェルヌィシェフスキーにたいする様々な評価がマルクス主義陣営の側に立つ研究者のなかに生まれる，プレハーノフは彼を啓蒙主義

にひきつけたし，レーニンは史的唯物論一歩手前まで来ていたと高く評価し，ルカーチは啓蒙主義とマルクス主義との中間に座を占めると評価する。そして普通，チェルヌィシェフスキーのこのアンチノミーは史家によって指摘されずに，いきなり彼の人間学的特徴をロシアの後進性に還元することによって一挙に片づけるのである。このアンチノミーの構造の遠因をロシアの後進的な経済・社会構造に求めることはできるにしても，それのみによって説明することは当時のロシアの知的状況を無視するが故に納得の行くものではない。むしろ啓蒙と革命とを同時にロシアにおいて遂行しなければならないというチェルヌィシェフスキーの性急さのなかにアンチノミーの構造を求めることができるのである。彼は『グラノフスキーの著作についての論評』(1856) の中で認めている如く，ロシアは西欧より文物において大変遅れているので，一刻も早く西欧の知識を導入して，ロシアの「闇の王国」に光を当てることが急務で，歴史家の任務はロシア独自の学問を確立することでなく啓蒙することである。彼自身この啓蒙の活動を任務の一に数えていたからこそ西欧思想を導入し，普及することに努め，フォイエルバッハの唯物論は言うに及ばず，J・S・ミルの経済学，ギゾーとルイ＝ブランの西欧社会史，フランス空想社会主義等を精力的に焼直した。西欧の知識水準に至りつくことはロシアの西欧にたいする劣等感を癒す唯一の手段であった。と同時に，チェルヌィシェフスキーは，西欧資本主義がプロレタリアという癌をもたらす制度であるのだから，それを踏襲しようとしている農奴解放を是が非でもロシアは回避しなければならないと考えて，西欧ではとうに歴史上消え去ってしまった農村共同体が奇しくもロシアに残存している以上，これを土壌として資本主義を経ずに共産主義に，正しくは農民共産主義に到達できうると考え，そのために一早く農民革命を実現することであると空想したのである。このように啓蒙と革命を同時に遂行しなければならないという性急さが先きの両極のアンチノミーを形成したのである。ロシアが資本主義を経ずにただちに共産主義に到るという発想自体がこの性急さを如実に示すものであ

ると同時に史的発展の媒介性の除去を意味しているのである，アンチノミーに欠けているものがまさしく弁証法のこの媒介性である。一方の極に啓蒙，つまり歴史の進歩は知識の進歩であるというテーゼが，他の極に革命，つまり歴史の進歩は階級闘争であるというテーゼが立ち，両者の媒介がなく，いずれもが歴史の進歩の起動力，推進力であるというチェルヌィシェフスキーの歴史哲学は，このような事情の下でうまれ，このアンチノミーを克服する時間的余裕すらも許されなかった。それがまた，彼が旧来の人間学と空想社会主義の哲学とを完全に克服しえなかった所似であり，彼の人間学的唯物論の特徴ともなっているのである。

使用テキスト

Н. Г. Чернышевский : Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах, Дополнительный том, 1939～1953.
Государственное издательство художественной литературы, Москва.